

## ピアジェーワロン論争の展開 (1)

-1930年代前後の心理学とピアジェ、ワロン-

足立自朗(埼玉大学) 加藤義信(愛知淑徳大学) 亀谷和史(日本福祉大学) 日下正一(福島大学)

1. 1930年代前後の「発達」をめぐる心理学の状況  
19世紀後半に提唱された進化論は、その後の心理学における発達研究を促すものであった。20世紀初頭の「児童研究運動」にみられるように、心理学者に大きな影響を及ぼしたのは Darwin の進化論ではなく、むしろ Haeckel の「生物発生原則」(=反復説)だったようである。「個体発生は系統発生を繰り返す」という Haeckel のテーゼは('20年代には強力な反証が提出されたにもかかわらず)、1930年代にも世界中に鳴り響いており、いわば当時の時代精神にさえなっていたことを知っておく必要がある(cf. Gould 1977)。

20世紀初頭から'30年代までを一瞥してみると、米国では、Hall が反復説に基づいて子ども・青年の研究を行ない、ドイツでは、Stern が個体発生と系統発生とを結び付けようと試みた。これに対し、Koffka は、Claparede とともに反復説を否定し、個体発生と系統発生との「一致説」correspondence theory を主張して両者の並行関係のみを認めた。ロシアでは、Vygotsky が個体発生と人類の歴史的発達との関係をにらみながら、「最近接発達領域」の理論を構築していた。

他方、意識心理学の対立物として1910年代に誕生し、'20年代に確立された行動主義は、その徹底した経験論によって発達の概念そのものを揺るがした。それと同時に、精密科学をモデルとして心理学に「科学主義」を導入した。厳密に統制された実験、測定・数量化・テスト……。客観性を求めるが故に、観察可能なものを見えないものによって「説明」することを拒絶するこのラディカルな経験論は、米国内を席卷したばかりでなく、形而上学的な合理論に浸されていた大陸の心理学にも大きな影響を与えた。

## 2. 反復説と Piaget, Wallon

'20年代から'40年代にかけて、子どもの発達を研究する心理学者たちは、賛同するか否かを問わず、上記の反復説を直接意識するか、あるいは、間接的にその影響下にあった。

生物学者でもあり、Claparede の門下生でもあった Piaget は、系統発生(or 科学史)と個体発生との関係を意識的に追い続けた。その初期の研究において、子どもの思考をたとえば魔術的・アニミズム的なもの

と特徴づけることにより、未開人の成人と文明人の子どもとの類似性(未開人=子ども)を承認し、反復説への理解を示した(Piaget 1927)。ただし、系統発生が個体発生の「原因」であることを承認したわけではない。一方、Wallon は「子どもが一種の未開人であり得るのは何故か?」という問いを提出し、反復説の説明と並行論とを否定し、子どもの思考様式と未開人のそれとが類似しているのは「偶然の一致」だと見る。前者には近代的な思考技術の運用能力がなく、後者にはそもそも技術不在である、と(Wallon 1942)。

Piaget も Wallon も共に、Haeckel の反復説を説明原理としては否定したものの、個体発生と系統発生の現象的一致を部分的にせよ承認しており、「子ども=未開人」という(誤れる)図式を受け入れていた。

## 3. 行動主義と Piaget, Wallon

Piaget は少なくとも'40年代までは、行動主義をまともに取り上げず、むしろ、黙殺していたのではないかと思われる。研究方法については、Piaget は「臨床的」な面接プロトコル(or 観察記述)の質的分析を重視し、統計的分析をせいぜい%表示のところにとどめていた。「実験」は実施したが、測定の可能性について否定的であり「テスト」を用いることはなかった。これに対して Wallon は、Watson が意識を排除したことに批判を加えたけれども、そして、自身は「臨床的」な方法を採用していたにも拘らず、行動主義の周辺に生まれていた「科学的」な方法についてはきわめて肯定的な評価を下した。意識心理学の内観法を形而上学的であるとして退けつつ、統計的な手法、テスト、測定などは精密科学の基本的要請として積極的にその使用を勧奨した(e.g. Wallon 1934, 1936)。

当時、この両者はともに、行動主義の学習理論が説明概念としての「発達」を呑み込んで、それを不要にしてしまう可能性について想定していなかったようである。だから、単に無視したり、方法(論)レヴェルで行動主義を捉えていたのであろう。(この点では、Vygotsky の先見性が際だっている)。Piaget と異なって、行動主義周辺の研究方法に関して'30年代には Wallon が積極的な評価を行っていたことは注目される('31年に訪ソした後は、ロシアの心理技術学 psikhotekhnika を高く評価していたほどである)。